

模様であったが、病床にあり乍ら最後まで努められる姿は誠に精進常業の聖なる姿であった。殊に晩年は「天神様の夢枕とは」という標題で稿を草された。

○香巖撃竹の話

これは昭和四十年一月十八日御殿場市東山学勞窟に先生を訪問したとき対談中に話された。「中国鄧州香巖寺の名僧智閑が山寺にあって修業中、庭の掃除をしているとき箒のはずみで瓦のかけらがはき飛ばされて竹に撃突「カチン」と音を立てた。この撃竹の音に無名の僧智閑が豁然として悟を開き修行を重ねてついに世人から尊信を受ける名僧になった」。この話は後日、静岡県高等学校PTA連絡協議会の研修会の折、鎌倉の円覚寺内統灯庵の須原耕雲師の講演の中にもあり印象を深めるものがあった。

○病床の対話から

先生が肝臓の痛みを訴えられていた頃は全身の浮腫が

あり、昭和四十年四月十二日東山の学勞窟を訪問の折は浮腫もひいて血色もよく見受けられた。昭和四十年にはいつてからは天神様の話をよくされ、更に毎回の様に明治神宮、乃木神社、生祠、旧知旧友のこと、聖徳誌、富士文庫報のことを話題にされ、機関紙は継続してこそ生命があると、その継続を強く希望されていた。対談中時々痰が咽喉にたまり難儀のようで、その都度杉浦女史が機を失せず取り除いていた。病床の先生の看護から、原稿の口述筆記をされた女史の献身的な勤めは先生の大きな支えであった。

加藤博士を偲んで

国立国会図書館国会分館長
国学院大学文学部講師

森田康之助

加藤玄智博士の御名を私が知ったのは、まだ中学生の頃、たまたま手にした史学雑誌で東京帝国大学の史学関

係講義題目を見て行くうちに、神道担当として博士の名と講義題目を見出してのことであった。博士の著書を披見したのは終戦後間もなく、『神道の宗教発達史的研究』が最初であった。こう申せばまこと不勉強ぶりを披露するようなものであるけれども、始まったばかりの占領政策が、ことごとくに神道を誹謗する風潮に大に疑問を感じて、神道研究に一念発起したとき、まず手がかりとしてこの高著を繙いたわけなのである。当時のこととしてほとんど棄て値で神田の古書肆の店頭に、塵にまみれていたことを覚えてゐる。おそらくは中学生の頃に接した、

神道学者としての博士の高名の記憶が、この書を選ばせたのであろうが、結果に於てはまことに成功であった。神道は宗教であり、日本の固有教というべく、わけて國家的神道に至っては古今一貫、全く日本の國民的宗教であるという博士の一千余頁の主張は、三百余頁の資料と数多くの図版写真並に精細な索引と相俟って、強い説得力を以て人に逼まる力を有っている。私は本書を基礎に資料篇の指示に従い、読書の範圍を拡げて行き、壁に

衝きあたるとそのつど、索引をたよりに本論の各章節を読み返したのであった。

昭和三十一年七月十日付で博士から書翰をいただいた。『知性と宗教——聖雄信仰の成立』惠贈のたよりである。見返しには猷呈の二字が記され、視力を喪われた博士の筆と知って、この御厚意はありがたかった。拙い読後感を呈したところ、博士から懇篤なお招きを再三忝くし、御殿場に訪れたときはことのほかよろこばれ、長時間の御指導と杉浦さんの手料理笹飯をおよばれた。後刻承れば私に長い時間を割かれたため、発熱されたとか。学問を愛し、わが国で最も大切な神道学のために万事を抛うって悔なき御熱意に深くうたれたのであった。

慎 莫 怠

皇学館大学教授 鎌田純一